

LIBRARY NEWS

令和5年12月1日 No.8

新座市立第三中学校

校長 石田 和男

(図書室だより) 図書整理員 名本 浩子

気温が20度を超える季節外れの暖かな日差しに ほっこりしたかと思えば、真冬並みの寒気が到来し、あわてて防寒着を出して重ね着をするといった、1週間の中でも、朝晩でも、寒暖差が大きい日が続いています。

例年より気温が高い傾向が続き、新座市の『平林寺』の紅葉も、例年より遅いのではないかと感じていましたが、このところの寒暖差で、ようやく紅葉の見ごろを迎えました。

『平林寺』は、乗換案内の「ジョルダン」というサイトで、「埼玉県の紅葉人気ランキング」で1位にもなっています。最近、紅葉を楽しみに訪れる人が一気に増え、総門の前で記念写真を撮ったり、色づいた木々の葉にレンズを近づけてカメラに収めたりして にぎわいを見せています。



美しく色づいた紅葉の景色は、毎年見られますが、木の葉の色づき具合は、おそらく今までも、これからも同じものはないのでしょうか。そう思うと、今、目にしている紅葉の美しさとの出会いは、まさに一期一会であり、尊いものに思えてきます。

紅葉の美しさだけでなく、いい香りを匂ったり、心に響く曲を聴いたり、おいしいものを食べておいしいと感じたり、寒さで冷えた体を温めるとホッとしたり、人間が持つ感覚で“幸せ”を感じるものがたくさんあり、その感覚を味わえることは とてもありがたいことだと思います。読書を通して感じる気持ちも、人間ならではの素敵な感情ではないでしょうか。

今日からは12月。12月といたら、“クリスマス”。“クリスマス”といたらプレゼント。クリスマス、誕生日、記念日、何にしてもプレゼントをもらうのは、ワクワクして うれしいものです。プレゼントを贈る側も、プレゼントを受け取る人が喜ぶ顔を想像しながらプレゼントを選ぶのが楽しいのではないのでしょうか。

そこで、オー・ヘンリーによる短編小説『賢者の贈り物』から今年最後のクイズです。

1ドル87セント。クリスマスは明日だというのに、たったこれだけしか残っていない。この少ないお金を元手に、どうしても贈り物をしたいと、夫婦は考えていた。妻のデラは、自慢の長く美しい髪を売り、夫のジムも、祖父の代から受け継がれたものを売った。こうして、それぞれ自分たちの大切なものを売って手に入れたお金で贈り物をしたのだが、お互いの贈り物は役に立たないものになってしまう。宝物を失い、贈り物も無駄になってしまったけれど、お互いを思いやる『真実の愛の贈り物』を手にした二人こそ、本当の賢者と言えるだろう。

では、問題です。お金を工面するため、妻のデラが売ったのは、自分の長く美しい髪ですが、夫のジムが売った、代々受け継がれたものとは何だったでしょう。

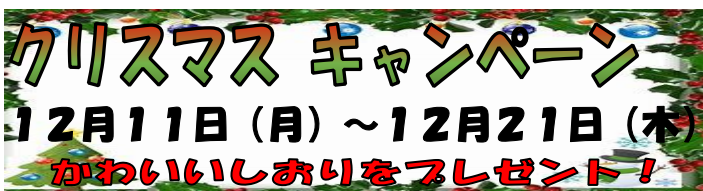
- ① プラチナ万年筆
- ② 金時計
- ③ ダイヤ ネクタイピン



前号のクイズの答え、『それを世界というんだね 空を落ちて、君と出会う』で、物語の中で不幸になった者を救うために、少女と少年が飛び込んだ物語は、①の人魚姫でした。

今号の問題の答えをみつけるオー・ヘンリーの本は、分類番号933、教科書関連のコーナーにあります。

今年も、クリスマスキャンペーンで、本を借りた人には、かわいいしおりをプレゼントします。ハロウィンのしおりに引き続き、おいしそうなクリスマスドーナツしおりも加わりました。どれも かわいらしくて選ぶのに迷ってしまいますよ。お楽しみに！みなさんの来室をお待ちしています。



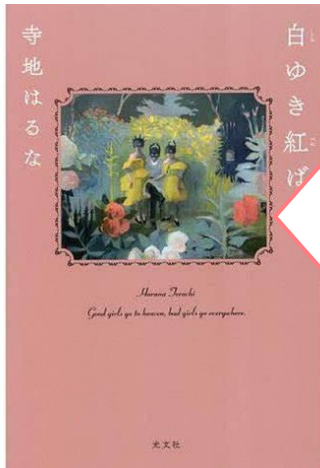
新着図書も
まもなく届く
予定です。



新着図書のコーナーに、タイトルから「冬」や「クリスマス」をイメージする次の2冊を見つけました。

『白ゆき紅ばら』 寺地はるな/著

(光文社)



行き場のない母子を助ける施設『のぼらのいえ』。

子供たちの世話や家事を強いられ、未来のない祐希。自分は何もできないから、ここにいるしかないと思い込んでいる紮果。そして、『のぼらのいえ』の経営者、志道さんが、『のぼらのいえ』の子供たちにしてきたことが明らかに。

薄幸な2人が互いに思いやる優しさ。重苦しい結末にはわずかな救いがある。そんな寺地さんらしい作品です。

『ギフトライフ』 古川 真人/著

(新潮社)



政府と企業により制度化された安楽死と人体実験のための生体贈与という「ギフトライフ」制度。提供者の家族にはポイントが与えられる。

重度不適正者の家族を施設に入れたことを後悔し、申請を取り消すための茶色のカードを必死で探す人たち。

素敵な「ギフト」とはほど遠い、恐い「ギフト」の話です。

先月、「文化の日」の前日、11月2日付けで、学術や芸術、人命救助などさまざまな分野で功績のあった人をたたえる、2023年秋の褒章の受賞者が発表されました。褒章には、『紅綬褒章』や『緑綬褒章』などがありますが、学術研究や芸術文化への功労者に贈られる『紫綬褒章』を受章したのは11人。そのうち、直木賞を受賞した『容疑者Xの献身』をはじめ、長年にわたってミステリー小説を中心に、数々のベストセラーを執筆してきた作家の東野圭吾さんや、歌集『サラダ記念日』で短歌ブームを起こした、歌人の俵万智さんが“芸術文化功績”で受賞しました。

そこで、紫綬褒章を受章した東野圭吾さんと俵万智さんの本を紹介します。三中の図書室にも、東野圭吾さんの作品は、「加賀恭一郎」シリーズ、「ガリレオ」シリーズ、「マスカレード」シリーズなど、そのほかシリーズ以外の作品も数多くそろっています。同じ東野圭吾の作品なのに作風やテーマが異なっていて、どの作品もおもしろいです。ぜひ、読んでみてください。

新着

『魔女と過ごした七日間』 (KADOKAWA)



中学生の月沢陸真は父を殺害された。見当たり捜査官だった父は、強盗殺人事件の犯人を見つけ、事件に巻き込まれたのか。

陸真は、友人の純也、人間を超えた才能を持つ円華とともに父の死の真相を追う。その中で、DNAを秘密裏に管理しているという警察の闇も浮かびあがる。

魔女と過ごした陸真のひと夏の冒険ストーリー。

『流星の絆』 (講談社)



「シー、かたきとる。父さん母さんを殺したやつ、シーが殺してやる」

両親を殺された三兄妹は、流れ星にかたき討ちを誓う。14年後、犯人を突き止める最初で最後のチャンスが訪れる。完璧だったはずの復讐計画だが、最大の誤算は妹の恋心だった。

まさかの真相。テレビドラマ化もされた作品です。

『サラダ記念日』

(河出文庫)



『あなたと読む恋の歌百首』

(リブリオ出版)



「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

これまでの短歌の常識を覆す新しい短歌の形。

『博士の愛した数式』

小川 洋子/著 (新潮社)



小川洋子さんは2021年秋の紫綬褒章受章者。

『博士の愛した数式』は第1回本屋大賞受賞作品です。

記憶が80分しかもたない博士にとって、家政婦の私はいつも“初対面”。

数字の不思議が満載で、おもしろく、博士と私と私の息子の3人の、家族にも似たつながりに心温まる物語。